

出版記念オンラインセミナーでの質問への回答

体育について：講演でご紹介いただいた後輪を自在に動かすためのキャスターの作り方をうかがいたいです。

【回答者：佐々木高一】

●用意する材料（1人分）

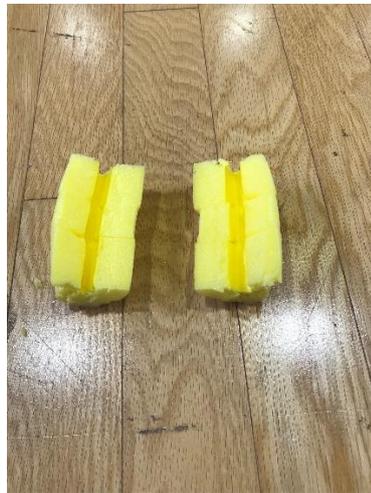
キャスター付き花台2、プールスティック1、ビニールテープ
※全て100円ショップで売られているものを使用しました。

●作り方

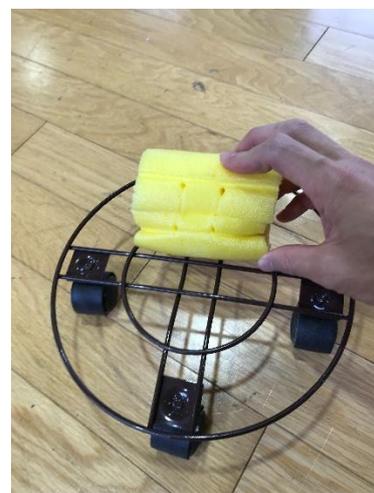
① プールスティックをカットします。



カットする長さの目安



半分にカットします



切れ込みを入れます

② カットしたものを取り付けます



キャスターにはめ込み
ビニールテープで固定します



反対も同様に取り付けます



2つ作成します

③ 車いすに装着します



- ・左右の後輪に取り付けます
- ・タイヤの中央に位置するようにします
- ・車いすのブレーキはかけたまま使用してください
(ブレーキを解除するとキャストが外れます)
- ・まずはゆっくりのスピードで直進や回転を行い、キャストが固定されているかを確認します



- ・タイヤの太さによって固定が甘い場合は、左の写真のように追加で取り付ける必要があります



ホームセンターで売られている保温チューブを使用

●留意事項

・キャスト付き花台は本来とは異なる使用となります。そのため、安全性は手を加えた人の責任となります。安全・確実に動くように念入りにテストし、使用前にはその都度、点検や整備を行うようにしてください。

重度重複障害があり、反応が極めて乏しい児童生徒に対して、いつから（どの段階からは）教科の指導を始められると考えたら良いのでしょうか？

この点について『肢体不自由教育』244のp.13で下山先生が国語や音楽を例に書かれているのを拝読しました。算数の場合はどう考えたら良いかなど、より詳しいお話をうかがいたく、よろしくお願いいたします。

【回答者：石田周子】

先日、桐が丘で算数の研究授業を行った際、講師の川間健之介先生より、「算数に取り組めるようになるのは対象の永続性を獲得してからではないか」というお話をいただきました。算数という教科や、数概念をどのように獲得していくのかについて精通していくと、そのようなことが言えるようになるのだと思います。

では対象の永続性を獲得していない子供は算数を学ばなくてよいかということ、そういうことではないと思います。算数の学習につながるように「環境の把握」に関することを十分に行うこともあれば、算数的な活動にある程度時間をかけてじっくり取り組むということも考えられます。その点については各学校で判断すればよいことかと思えます。大事なことは、目の前の子供の力を、先を見通しながら伸ばすために、いま何をすべきかを根拠を明確にして考えるということです。そのためにも、各教科について学ぶことは役に立つと思われます。

障害の重い子供にとっても各教科の指導の大切さが求められていることはわかっていました。それでは、各教科等を合わせた指導についてはどのように捉えれば良いのかお聞きしたいです。

【回答者：石田周子】

下山先生のお話にもありましたが、各教科等を合わせて指導した方が効果的な場合は、そのような指導形態をとることもあるかと思えます。ただしその際、何と何を合わせているのかをきちんと押さえておく必要があります。そのためにも、各教科について学んでおくことは、指導の根拠を明確にすることにつながるので大事なことだと思えます。

活動ありきで授業づくりをすると、想定する活動に合う指導目標をあちこちの教科から引っ張ってくるため、指導目標が盛りだくさんになりがちです。これでは、その単元や授業のねらいがぼやけてしまい、子供の力も身に付きにくくなると思います。指導目標を定めて、その達成を目指すために、必要であればある教科とある教科を合わせるという順で授業をつくる方が、ねらいも定まり力が身に付きやすくなると思います。